

危うきに近寄らずのすすめ 片山由美子

声のして人影のして牡丹の芽
最近、こんな句を見つけて驚いた。というのは、私の
旧作に次のようなそっくりの句があるからだ。

人声が過ぎ影が過ぎ白牡丹

ほとんど同じ発想だし、偶然こんなことが起きるもの
なのだろうか。同一句とはいえないかもしれないが、身
近なところでこんな句を見ると、どうも釈然としない。

類想句や類句は、ほとんどの場合意図して作るもので
はない。偶然できてしまうのである。悪意がないからこ
そ、問題だといえる。誰でも新鮮な句を作りたいと願っ
ているにもかかわらず、すでにどこかで作られた句と同
じものが生まれてしまう。どうしたらそれを避けられる
か、多くのひとが抱えている悩みに違いない。

類句が生まれる原因は、誰もが似たような経験をし、
同じようなことに心を動かされることにある。例えば、

八月十五日には、決まってこんな句が詠まれる。

黙禱の一分長し蟬しぐれ

俳句としてはもちろんきちんとできているのだが、お
そらく全く同じ句を作ったことのあるひとは多いのでは
ないだろうか。そこで、類想から逃れたいと思うなら、
このあたりの句はできても捨てるという覚悟をしておか
なければならぬ。

これは、共通の体験による類句であったが、もっと注
意する必要があるのは、ある季語から連想するものが似
てしまいやすい、はつきりいえば、発想がパターン化し
ているものがあるということである。

次の二句をくらべてみよう。

海開き沖の白帆も祓はるる

岩祓ひ雲を祓ひて山開き

「海開き」と「山開き」の違いはあるものの、「海」

「山」そのものではないほかのものも祓い清めるとい
う点が共通している。この二句を類想だといっているわけ
ではないのだが、「海開き」「山開き」のシーズンにな
ると、全国の結社で毎年こういう句が活字になっていく可
能性はきわめて高い。誰の句が最初であったかを突き止
めることが、おそらく不可能な類いの句である。

瓜の馬片足あげて立ちにけり

韋駄天の片足浮かせ瓜の馬

一脚は蹴りあげしまま茄子の馬

祖母乗すと足の短き茄子の馬

長膳の夫には低き茄子の馬

これらはどうだろう。盆の句に多いパターンである。

三句目まではその姿を詠んだもので、片足が浮いている
という見方が共通している。あとの二句は、心情におい
て同一のものである。子のために、あるいは母のために
低く、という句も多い。

「涅槃図」も、類想を生みやすい季語のひとつだ。

涅槃図を抜け出し猫が縁よぎる

涅槃図の裾をこの世の猫よぎる

国宝の涅槃図に猫画かれゐる

涅槃図は冥し日と月懸かりゐて

日と月と描かれ暗き涅槃の図

涅槃図にはふつう描かれぬ猫を配する、また、褪せ
た日と月に注目する、それぞれ発想としてはおもしろい
はずなのだが、独創的とはいえない。

こうした類想をよびやすい季語を挙げてみると、啓
蟄、鶯餅、犬ふぐり、滴り、水中花、羽拔鶏、流灯、七
五三のほか、まだまだある。類句を作らずに済む一番簡
単な方法は、この種の季語を敬遠することである。どこ
かの俳句大会に応募して、せっかくの受賞を取り消しな
どということにならないようにするには、まず、こうし
た危うい季語を避けておいたほうが無難である。

つぎに、ある季語にまつわるムードを切り捨てること
を考えたい。「螢」を例に挙げるなら、水音、闇、橘、
日暮れなどの、すぐに思いつく言葉は捨ててから句を作
るのである。「暮れてなほ空のあかるき」「空あをあと
暮れ残り」などの決まり切ったフレーズも放棄する。赤
や黄色の花や夕焼けに対して、「燃ゆる」「炎」なども禁
句である。また、どんな季語を配するにせよ、「どの道
を行くも○○」「村（島）にひとつの○○」「また元の二
人に戻り」「いつかひとりとなる二人」といった常識的
な言い回しも避けるのが得策。句作りを長く続けている
うちに身につけてしまったものを洗い落とす、これを心
がけてみてはどうだろうか。